

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370248

研究課題名(和文) 近世仏教説話集の形成・出版・享受についての研究 - 地蔵寺所蔵文献との関わりから

研究課題名(英文) A study on anthologies of Buddhist narratives in the Edo period from the viewpoint of formation, publication, and reception

研究代表者

山崎 淳 (YAMAZAKI, Jun)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：20467517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：大阪府河内長野市の地蔵寺を中心にいくつかの寺院と文庫の所蔵文献を調査し、江戸時代(近世)の仏教説話集について分析を進めた。その結果、中世のみならず江戸時代においても仏教説話集の形成や享受の場として寺院が重要であること、所蔵文献1点1点の精査が出版に至る経緯を考える上で有効であることを従来よりも明確に示すことができた。さらに、地蔵寺では今後の研究につながる新たな資料群を見出すことができた。

研究成果の概要(英文)：I examined the documents owned by several Buddhist temples and libraries with an emphasis on Jizoji temple(Kawachinagano,Osaka) and analyzed anthologies of Buddhist narratives in the Edo period. As a result, I showed more clearly than before that Buddhist temple was important as a place of the formation and reception of the anthologies not only in the Middle Ages but also in the Edo period, and that scrutiny of each document is useful for considering the circumstances leading to publication of the anthologies. In addition, I was able to find a group of new documents in Jizoji temple that will lead to future research.

研究分野：日本文学

キーワード：寺院所蔵文献 仏教説話集 近世 版本

1. 研究開始当初の背景

(1)文学の成立基盤としての寺院：文学作品の成立基盤の一つに寺院がある。特に中世文学は、仏教と不可分であるが故に、寺院での関連文献調査が着実に進められ、研究の大きな進展を見た。一方、近世に目を転じると、寺院の所蔵文献において数の上で古代・中世以上に残っているのが近世のものであるにもかかわらず、それらが近世文学・芸能の研究に有効に活用されているとは言い難い状況にあった。これは、寺院調査の担い手が、主に中世文学研究者であるということが大きかったと言える。加えて、近世文学については、儒教の存在がクローズアップされることが多く、仏教と文学との関係は研究の中心であるとは言えない状況でもあった。もちろん儒教は、近世文学の大きな背景として位置付けられてしかるべき存在である。しかしながら、近世全般を通じ人々は仏教と身近に接していた。「寺請」などの幕府の宗教統制によって、仏教自体はむしろ制度的に存在を保障されていた面もある。したがって、近世における文学と仏教には、強い関係が予想されるのである。実際近世には、膨大な量の仏教説話集(いわゆる勸化本)が製作・刊行されている。ところが、そうしたものの一点一点の分析や位置付けは、必ずしも進んでいなかった。また、近世文学の大きな要素である出版との関係も、寺院所蔵文献における版本の残存量からすれば、開拓の余地が大きいと考えられた。すなわち、仏教を通して近世文学を考えるに当たり、寺院所蔵文献には大きな可能性があると認められたのである。

(2)報告者の研究経緯：報告者は、近世の代表的仏教説話集の一つである蓮体編『観音冥応集』を読解・分析するに当たって、蓮体開基にして終焉の地である地蔵寺(大阪府河内長野市)の所蔵文献に着目し、平成20~22年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(課題番号:20520163)及び平成23~25年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(課題番号:23520246)により、同寺の悉皆調査を進めてきた。その調査の過程において、同寺所蔵文献の形成の解明に有効と目される資料、出版研究・諸本研究に役立つと考えられる資料が新たに見出されたため、(1)で記した背景も含め、同寺の調査を今後も継続する必要が生じてきた。

2. 研究の目的

(1)寺院所蔵文献の全体像とその形成過程の解明：近世の仏教説話集が成立した基盤として非常に重要な位置を占めるのが、説話集编者(僧侶)の関わった寺院(特に住持であった寺院)の蔵書群である。ただし、编者当時の蔵書群と現在の蔵書群では、内容や構成が必ずしも同じではない。したがって、説話集の成立基盤として寺院所蔵文献を考えるためには、現時点での所蔵文献の全体像を把

握した上で、蔵書の伝来を含む時代的変遷を解明する必要がある。

(2)近世仏教説話集の形成・享受の様相の解明：近世を通じ仏教説話集は編纂され続けた。それらは先行作品(古代・中世成立のものも含む)をどのように受け継ぎ、同時代や後世の作品にどのように利用されていったのか。これらの問題を明らかにしていくことは、文学史的な意義を持つ。この点に関し、寺院所蔵文献は、きわめて注目されるものである。寺院所蔵文献では、編纂された説話集と、その編纂に利用されたとおぼしい先行作品がともに見出される場合がある。また、それらの文献には所持者の書き入れが残っていたり、何らかの覚え書きの紙片が挟み込まれていたりすることもある。すなわち寺院所蔵文献には、近世仏教説話集形成の現場が保存されている可能性を期待できるのである。本研究で主たる調査対象になる地蔵寺所蔵文献は、まさにこのケースに該当する。

(3)近世仏教説話集の出版に至る経緯の解明：出版は、近世を特徴付ける文化事象である。仏教説話集を含む仏教書においても、おびただしい点数が刊行されたことからわかるように、出版は無視できない要素である。寺院所蔵文献には、出版の経緯を考える上で重要な伝本(写本・版本とも)が含まれていることがある。また、書肆との関わりを示す資料が見出されることもある。この出版との関連を視野に入れることで、近世仏教説話集成立の様相がより鮮明に理解されると期待できる。

3. 研究の方法

(1)地蔵寺所蔵文献の悉皆調査：調査の中心となる地蔵寺(大阪府河内長野市)には、版本を中心とする文献を収めた約50の箱が存在する。この50箱については昭和40年代に作成された目録カードが存在する。ただし、作成から40年以上が経過しており、その内容も基本的に整理番号と書名からなる簡単なものである。また、その目録に記載されていない文献も存在する。そこで、当該目録カードと現存文献との照合、整理番号のない文献への番号付与、現存文献全体の詳細な書誌調査を進めた。同時に重要と認められる文献の撮影を行った。

(2)地蔵寺以外の蓮体関連寺院の文献調査：地蔵寺所蔵文献に名前の見えた寺院、あるいは蓮体や浄厳(蓮体の師)と関係のあった寺院の文献も並行して調査した。主に対象としたのは、本研究課題の研究協力者である中山一麿(大阪大学招聘研究員)が研究代表者として調査を進め、報告者も調査に参加している覚城院(香川県三豊市)と木山寺(岡山県真庭市)である。これらの寺院では、蓮体・浄厳関係の文献とともに、版本を軸とした調

査を行った。

(3) 図書館・研究機関等での文献資料収集：関係論考の収集とともに、関係する文献資料の調査を行った。可能な場合は、写真を撮影し、あるいはデジタル画像・マイクロ写真の複写を入手した。具体的には、近世の仏教説話集とともに、近世における『元亨釈書』の注釈書や、蓮体が使用した可能性のある漢籍の和刻本の画像や複写を入手することに努めた。

(4) データ入力：書誌を記入した調書の情報をパソコンに入力し、データベース化を行った。本作業はこれまでの研究課題からの継続であり、新規の調査情報を加えていくとともに、目録としての体裁の整備に努めた。

(5) 成果の外部への公表：以上の調査・作業を踏まえ、重要と認められる作品の精読・分析を行い、その成果を学会・学術雑誌等に発表した。

4. 研究成果

(1) 地蔵寺所蔵文献の全体像及び所蔵文献と蓮体著述との関わり：地蔵寺所蔵文献は、版本を中心とする50箱から成る。現在、約9割の調査を終え、その成果の一部は〔学会発表〕で公表した（残りの約1割は『秘密儀軌』と近代の文献であり、それらの分量とおおよその中身は下調査によって把握できている）。また、〔雑誌論文〕や〔図書〕では、蓮体編『礪石集』の読解や出典研究において地蔵寺所蔵文献調査から得られた情報を活用することができた（研究目的(2)に関連）。この成果により、中世のみならず近世においても仏教説話集の形成や享受の場として寺院が重要であることがより鮮明になったと言える。さらに、本調査での重要な成果として、新たな資料の発見を挙げることができる。これまでの調査対象は上記の約50箱だったが、本研究の3年目後半において、地蔵寺ご住職・堀智真師から、別に聖教類（僧侶によって寺院で作成され、主に写本で伝えられる書物としておく）が存在するとのご連絡をいただき、最終年度にそれが少なくとも18箱から成るものであることを確認した。現時点では本格的な調査に至っていないが、蓮体に直接関わる文献が散見されること、整理番号は付されていないこと、清掃を必要とする未整理のものが多数含まれていること、などが判明した。これまでに調査し得た地蔵寺所蔵文献は他の寺院に比べて聖教類が少なく、その点が大きな疑問であったが、新たな資料の出現は、所蔵文献の全体像、並びに蔵書形成の解明に寄与するものと期待される。

(2) 他寺院の所蔵文献と地蔵寺・蓮体との関わり：地蔵寺以外で調査を進めたのが、香川

の覚城院と岡山の木山寺である。ともに現代まで存続している真言寺院であり、香川・岡山は蓮体や師の浄厳が何度も訪れた地である。その点からすれば予想されたことではあるが、蓮体・浄厳に関連する文献が蔵されていた。特筆すべきは覚城院である。同院では、蓮体自筆本・所持本、蓮体の伝授・講義を記録した文献などを見出すことができた。詳細な調査とそれに基づく評価は今後の課題となるが、これらは覚城院の蔵書形成（いつ誰によってどのようにもたらされたか）を考える貴重な材料となるのみならず、蓮体の著作・所持本の分析、地蔵寺所蔵文献との関連において看過できない存在である。現時点では点の存在である覚城院と地蔵寺の近世文献が、線として、さらに他寺院との関係をも視野に入れることによって面として捉えられるようになることが大いに期待できるのである。

(3) 寺院所蔵文献における版本調査：覚城院調査において成果として挙げておきたいのは、版本調査に道筋を付けられたことである。寺院に仏教書の版本が多く蔵されているのは周知の事実である。ただし、版本の設置場所は必ずしも聖教類と同じではない。覚城院はまさにそのケースに該当する。このような場合、版本の調査が聖教類の調査よりも後回しになることもある。しかし、蔵書の全体像や形成を考える上で、版本の存在を無視するわけにはいかない。一方、覚城院調査は基本的に聖教類を中心としている。その点を鑑みて、報告者は別置されている版本の調査を聖教調査と並行して進めることを提案し、主に版本を担当することとなった。当該調査においては、一点一点の清掃と仮番号付与、簡単なデータ入力を進めている。版本調査と聖教調査を同時進行させることで、調査中における互いの知見の利用が即座に可能となり、調査の効率化に寄与できている。

(4) 地蔵寺所蔵文献と覚城院所蔵文献：覚城院の版本調査は現在も継続中だが、その過程において、三等（近世中期の覚城院住持）所持本『秘密儀軌』識語と地蔵寺蔵『秘密儀軌』識語に注目すべき重なりのあることが判明した。地蔵寺蔵本や覚城院蔵本には訓点や欄外注が記されている。それらは識語によって浄厳の講義に基づくものであることがわかる。これはたとえば随心院蔵『秘密儀軌』でも同じである。地蔵寺蔵本にはそこに蓮体識語（自筆）などの加わるものが散見される。そして、その蓮体識語が覚城院蔵本にも記されているのである。覚城院蔵本の識語は、浄厳 蓮体 慧濬 三等の順で記されている。三等識語は三等自筆、それ以外は別人の筆（ただしすべて同筆。おそらく慧濬）と認定できる。したがって、蓮体と三等の間には少なくともワンクッションある（この点に関してはさらに調査と考察を進める必要がある）

のだが、覚城院蔵本の前段階に地蔵寺蔵本が位置していることは明らかである。

(5)木山の善覚稲荷信仰及び木山寺所蔵文献：木山寺については〔図書〕において、木山信仰の大きな特徴である善覚稲荷及びキツネに関するコラム、並びに近世末期の末寺との関係を記した資料の紹介を執筆した。前者は5つの内容から成り、木山の善覚稲荷信仰が岡山県だけでなく兵庫県や大阪府、近世だけでなく近代にも広がりを見せていることを指摘した。その中で取り上げた資料において、木山神社蔵の絵画資料(絵馬)はひととき注目すべきものである。この絵馬には、明治42年(1909)の大阪での大火が描かれている。絵馬の情報からは、奉納者が蚊取り線香で有名な安住伊三郎(1867~1949)であること、火事の被害を免れたのが木山の神の力であるとして奉納されたこと、などが明らかになった。この絵馬は、寺院の悉皆調査の広がりや可能性を示すものと言えるだろう。後者で紹介したのは『末寺住職願並旦中御願控』である。この資料によって、木山寺末寺の住職決定に際し、末寺・本寺・管轄の龍野藩・旦那の間で具体的にどのようなやりとりがあったのかが明らかになった。たとえば、住職急病による無住状態を解消するため別の末寺の住職を兼帯させたが、急なことなので他の末寺へは回覧状による事後報告になった、という内容や、留守居役の僧侶を住職として推挙したい、という内容が本資料には記されている。少なくとも近世末期(1840年代)における寺院経営を知る上で有効な材料になると言えるだろう。なお、木山寺でも版本調査を継続中だが、同時に現在木山寺に移されている末寺の版本調査にも着手した。

(6)『伽藍開基記』の研究：近世の仏教説話集と出版という観点(研究目的(3)に該当)からは、各地の寺院の開基にまつわる説話を集成した『伽藍開基記』(黄檗派僧侶・懷玉道温編/元禄五年[1692]刊)を取り上げた。その成果が神戸説話研究会編の〔図書〕である。報告者は当該作品の全文翻刻(神戸説話研究会メンバーによる共同作業)の校閲と解題を担当し、解題では本作品が『元亨釈書』を引き継ぎつつ新たな展開を目指したものであり、僧伝としての性格を非常に強く持っていることを指摘した(本解題は、『元亨釈書』の近世における享受の具体的様相を明らかにしたものとしても位置づけることができる)。さらに、〔雑誌論文〕で『伽藍開基記』の編者自筆草稿本(岩瀬文庫蔵)を取り上げ、本作品の成立段階を具体的に明らかにし、刊行に近い段階で追加された部分の典拠が『四国遍礼霊場記』であることを、草稿本の匡郭の種類や『四国遍礼霊場記』の挿絵を視野に入れつつ指摘した。なお、この成果には、黄檗山萬福寺(京都府宇治市)や岩瀬文庫(愛知県西尾市)での文献資料調査が重要

な位置を占めている。その点で(1)~(5)の調査と同一線上にある。

(7)『元亨釈書』の近世的展開：鎌倉末期に成立し、早くから五山版が出た『元亨釈書』は、近世においても古活字本や整版本で刊行され、広く利用された作品である。たとえば、地蔵寺には寛永元年(1624)刊整版本が蔵されており、書入から見て、同本は蓮体所持本であった可能性が非常に高い。実際、蓮体は著作に『元亨釈書』をしばしば利用している。〔雑誌論文〕は、中世文学研究の範疇に入るが、そのような近世における『元亨釈書』の絶大なる影響力も視野に入れた上での成果である(その点で研究目的(2)に関連する)。同論文では、巻演という平安時代の僧侶及び彼が建立した相応寺という寺を取り上げた。そして、同寺建立の地が、古くは「河陽」(山城に属する)であったのが、『元亨釈書』では「河内」となり、それが道温『伽藍開基記』や蓮体『観音冥応集』といった近世の僧伝や説話集に受け継がれていくことを指摘した。「河陽」から「河内」への変化が『元亨釈書』編者の虎関師錬による改変かどうかは即断できないが、近世での伝承においては『元亨釈書』が起点となっていると位置付けることができるのである。

(8)西国三十三所関連文献の研究：本課題では、仏教書と出版との関係を研究する一環として(研究目的(3)に関連)西国三十三所巡礼(順礼)関係の文献も取り上げた。三十三所に関する書物は、巡礼が盛行した近世に数多く刊行されている。その多様性や変遷について、具体的には古地図、御詠歌(順礼歌)、浄瑠璃などを題材にして検討した。〔図書〕(及び〔学会発表〕)と〔雑誌論文〕はその成果である。前者では、近世後期に刊行された三十三所巡礼図(大坂屋長三郎版)を、他の三十三所巡礼図と比較し、地名の有無や方角を示す「西」の相違(字が斜め下に傾いているものが存在する)を指摘した。これらの事象は宗教的要素・観光的要素(讃岐・金比羅神社への航路など)の追加と関わっており、それが地図の多様性へとつながっていったと考えられる。後者では、寛文十年(1670)刊の浄瑠璃『西国卅三番順礼記』の道行文に三十三所の御詠歌ほぼすべてが利用されていること、文芸作品への御詠歌利用として規模が当時最大のものであることを指摘し(この点で研究目的(2)にも関連する)、さらに当該浄瑠璃刊行当時の御詠歌の詞章、近世前期における御詠歌の多様性についても検討した。なお、御詠歌の詞章(本文異同)に関しては、地蔵寺所蔵文献における三十三所関連書(貞享四年[1687]刊・松誉徹の編『観音靈験記』)の調査結果を生かすことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

山崎淳、浄瑠璃『西国卅三番順礼記』第三段目について 順礼歌(御詠歌)享受の一例、人間科学研究(日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要)査読有、15号、2018、pp.92-112

山崎淳、相応寺創建説話における「河陽」と『元亨釈書』語文(日本大学国文学会)査読有、158号、2017、pp.39-53

山崎淳、『伽藍開基記』の可能性、仏教文学、査読無、42号、2017、pp.75-76

山崎淳、岩瀬文庫蔵『伽藍開基記』の形成過程について 巻第五を中心に、人間科学研究(日本大学生物資源科学部人文社会系研究紀要)査読有、13号、2016、pp.161-184

山崎淳、蓮体編『礦石集』と地蔵寺所蔵文献 地蔵関連資料を中心として、仏教文学、査読有、39号、2014、pp.99-112

〔学会発表〕(計 4 件)

山崎淳、地蔵寺聖教と覚城院聖教 蓮体研究との関わりから、覚城院聖教調査進捗報告会、2018(於大阪大学中之島センター)

山崎淳、「西国三十三所順礼道中図」の多様性 大坂屋長三郎版を中心に、二〇一七年度 公開研究会 靈験寺院の書物と言説 西国三十三所霊場を中心に(国文国研究資料館 歴史的典籍NW事業) 2017(於四天王寺大学 あべのハルカスサテライトキャンパス)

山崎淳、九華山 地蔵寺(ポスターセッション) 日本宗教文献調査学合同研究集会、2017(於慶應義塾大学)

山崎淳、『伽藍開基記』の可能性 懐玉道温の目指したもの、仏教文学会、2016(於神戸女子大学教育センター)

〔図書〕(計 4 件)

山崎淳 他、和歌山大学 地域活性化総合センター 紀州経済史文化史研究所、二〇一七年度 特別展 紀州地域と西国順礼、2017、48、pp.18-19

山崎淳 他、和泉書院、近世寺社伝資料『和州寺社記』・『伽藍開基記』、2017、562、pp.445-486

山崎淳 他、法藏館、神と仏に祈る山 美作の古刹 木山寺社史料のひらく世界、2016、302、pp.159、190-191、206-207、218-219、254-257、288-295

山崎淳 他、和泉書院、論集 中世・近世説話と説話集、2014、502、pp.411-431

研究者番号：20467517

(4)研究協力者

中山 一磨(NAKAYAMA, Kazumaro)

中川 真弓(NAKAGAWA, Mayumi)

山崎 ゆみ(YAMAZAKI, Yumi)

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 淳(YAMAZAKI, Jun)

日本大学・生物資源科学部・教授